

23J-am05S

高齢者のせん妄ケアに対するクエチアピン院内坐剤の有用性

○行成美¹, 落合秀¹, 神原諒², 早川太朗², 河瀬真治¹, 伊藤由佳子¹, 中山英夫², 柴田敏之¹ (¹京都薬大, ²市立大津市民病院 薬剤部)

【目的】高齢患者におけるせん妄のケアには、クエチアピン (QTP) が第一選択薬として使用されている。しかしながら、QTP 製剤は経口剤であるため、嚥下困難な高齢患者には院内坐剤として使用することで改善効果が得られることが報告されている。本坐剤は製造元で開発されていないため、吸収性に関する詳細データは明らかとなっていない。(Palliat Care Res, 2017) これまで、我々はセロクエル院内坐剤の高いバイオアベイラビリティが坐剤からの QTP の溶出性と関連することを報告してきた。さらに、市立大津市民病院では、2 種の QTP 製剤を採用しているため、それらの院内坐剤としての有用性が期待されている。そこで、本研究では 2 種の QTP 製剤 (クエチアピン 50% 細粒 E E およびクエチアピン錠 トーワ) について院内坐剤を調製しラットにおける吸収性と溶出性に関する検討から院内坐剤としての有用性を薬物動態学的観点から評価したので報告する。

【方法】QTP 院内坐剤は、クエチアピン錠 25 mg トーワ微粉末化、またはクエチアピン 50% 細粒を秤量後、溶解させたホスコ S-55 に混和し坐剤用コンテナに分注した。2 種の坐剤についてパドル法にて溶出試験を行った。Wistar 系雄性ラット (10 週齢) に、クエチアピン錠 トーワ坐剤群、クエチアピン 50% 細粒院内坐剤群、対照として、経口投与 (50 mg/kg)、静脈内投与群 (0.5 mg/kg) に分け、投与後 24 hr まで経時的に採血し、血漿中 QTP 濃度から薬物動態速度論的解析を行った。

【結果・考察】In vivo 投与実験から、クエチアピン細粒 50% から調製した院内坐剤のバイオアベイラビリティは約 30% であり、経口投与群に比較して約 10 倍高い吸収性を認めた。このことから、QTP 院内坐剤の有用性が費用対効果の観点からも期待できるものといえる。